

『説文解字繫伝』にみられる反切下字混用 —梗摄入声と曾摄入声、および外転 —一等韻と二等韻の間の—

東ヶ崎 祐一

(韓国慶熙大学校)

南唐徐锴の《说文解字系传》有两种反切下字混淆现象：一是梗摄入声和曾摄入声之间的，一是外转一等韵和二等韵之间的。

本篇就此两种现象进行了分析和考察，结论如以下三点。

- (1) 关于梗曾两摄入声的反切混淆，实际上这是昔韵和职韵舌齿音之间的。职韵主元音，由于声母、介音和韵尾的前舌性影响，而变成前舌元音，由此造成与主元音狭窄的昔韵相混淆的现象。
- (2) 关于外转一二等韵的反切混淆，实际上这是外转一等韵舌齿音和二等韵之间的。外转一等韵主元音，由于声母和韵尾的前舌性影响，而变成前舌元音，由此造成与二等韵相混淆的现象。
- (3) 两种现象都反映出汉语回避舌头的前>后>前运动的趋势。

0. はじめに

1. 梗摄入声と曾摄入声の反切下字混用

- | | |
|----------------|--------------|
| 1.1. 論を進める前に | 1.2. 反切の示す特徴 |
| 1.3. 変化の起こった条件 | 1.4. まとめ |

2. 外転一等韻と二等韻の反切下字混用

- | | |
|----------------|--------------|
| 2.1. 論を進める前に | 2.2. 反切の示す特徴 |
| 2.3. 変化の起こった条件 | 2.4. まとめ |

3. 2つの現象の中国音韻史上における意義

4. 結語

0. はじめに

南唐(937-975)の徐鉉(920-974)が著した『説文解字繫伝』には、徐鉉と同時代人である朱翱(生没年未詳)の付けた反切(以下、繫伝反切と略称)が各文字に付けられている。

この反切について、王 1982 では「朱楷时代、《唐韵》已经通行，而朱楷独不遵用《唐韵》，当是根据当时实际语音而作反切，这是语音史的重要资料」と述べている。彼は『説文解字繫伝』が、当時用いられていた韻書である『唐韻』の反切を用いていないことから、この反切の示す音が当時の実際の発音を表している点で重要であるとしているのである。実際、徐鉉の兄である徐鉉の校訂した『説文解字（いわゆる大徐本）』には、『唐韻』の反切が使われているが、朱翱の反切はこれとは全く違うものである。

繫伝反切の研究はあまり行われておらず、総合的な研究としては嚴 1943、張世祿 1944、梅 1963、王 1982、張慧美 1989 の 5 編をみるのみである。これら各研究における反切の声類や韻類の分類結果をみると、嚴 1943、張世祿 1944、張慧美 1989 では『広韻』の同用規定に近いと主張しているのに対し、梅 1963、王 1982 のそれはより近世的で、宋代等韻図などにみられる体系に近い、と相違している。

また、先行研究では、主に繫伝反切の声類や韻類の分合状況の切韻体系との差異について論じており、声類や韻類内の細かな変化（分化や部分的合流）についてはあまり言及されていない。本稿ではそのような現象、すなわち繫伝反切にみられる、中古漢語では異なる 2 つの韻類に属する音が、反切において混用される現象を取り上げる。その現象とは梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用と、外転一等韻と二等韻の反切下字混用の 2 つである。

本稿においては、まず各々の反切下字混用について、個別に例を整理・観察し、それらがどのような条件下で起こっているのかを提示する。そして 2 つの現象は、一見全く違う変化であるように見えるが、実はともに同一の原理のもとで起こっているものであることを提示する。ここで取り上げる現象を反映している反切例はごく少数しか現れないのだが、それらが示す変化は撰や等位といった中古漢語音体系の枠組みを超えた現象であり、また漢語の通時的音変遷を考える上で重要な示唆を与えるものである。

1. 梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用

1.1. 論を進める前に

まず、梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用について取り上げる。

繫伝反切における梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用は、既に張世祿

1944 で触れられているが、より明確に指摘したのは王 1982 である。彼は梗撰入声と曾撰入声の反切下字が混用されていることから、この2つの韻類が合流していると考え、梗撰舒声韻（王の分類では「庚青」）と曾撰舒声韻（「蒸登」）の各々に対応する入声韻を「陌職」というひとつの韻類に分類した。

梗曾両撰が特に北方方言において中古漢語以降の早い時期に合流したことは、宋代等韻図などの音資料に現れている現象である。その詳細については佐藤 1973 や花登 1974 で論ぜられているが、これらによれば梗曾両撰の合流は既に中晩唐期の古体詩の押韻や反切資料に萌芽がみられ、しかもそれは入声から始まっている。

繫伝反切にみられる現象も、梗曾両撰の合流が入声から始まるという流れに沿ったものであり、それだけみれば何ら不思議とすべき問題ではない。しかし、他の論者がすべてこの通りに考えているわけではない。張世禄 1944 が梗曾両撰入声の反切下字混用について触れているのは前述した通りだが、それでも両撰の区別については存在したものとして扱っている。また蔣・呉 1997 では王に反論して、唐末～五代期の押韻で梗撰入声と曾撰入声とが押韻する例が少ないことから、入声韻でも梗撰と曾撰を分離させることを主張している (pp. 53-67)。

実際、繫伝反切の中に梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用を示す例は非常に少ない。繫伝反切では梗撰入声の音を示す反切は 229 例、曾撰入声を示すものは 129 例ほど存在するが、反切下字混用を示すものはわずか 10 例であり、全体に占める割合は 2.8% (10 / 358) と非常に低い。また、それらの反切の音韻的特徴についても、王 1982 では十分検討されていない。

以下ではこれらの反切およびその示す音を検討することにより、反切下字混用という現象がどのような音韻的状况を反映しているのかを考えることにする¹⁾。

1.2. 反切の示す特徴

繫伝反切において、梗撰入声と曾撰入声が混用されている反切は、以下の通りである。

(1) a. 反切帰字が梗撰入声、反切下字が曾撰入声（8例）

麦韻 𪗇：爰測反 柵：爰側反²⁾
 昔韻 碧：彼力反 祐：時即反 繡：自即反
 爽：希式反 圜：以陟反 疫：兪昞反

b. 反切帰字が曾撰入声、反切下字が梗撰入声（2例）

職韻 荊：齊石反 食：神隻反

この中には、誤写や反切帰字の誤認によると考えられるものも存在する。

・𪗇：爰測反、柵：爰側反は「側麥反」の誤りか

『広韻』では燥・柵の声母は初母であるが、反切上字の「爰」は云母であり、帰字と合わない。ところで、この2つの同音字（梗撰麦韻初母）の反切をみると、「側麥反」が4例存在する（策など）。繫伝反切では一つの音について複数の反切が用いられることが多いが、全体的には同一音に同一の反切を用いる傾向がある。そのことから考えると、「爰測反」「爰側反」はもともと「側麥反」であったものが、伝写の過程で反切上字と下字が逆転し、さらに「麥」が「爰」に、「側」が「測」に書き誤られたことによって生じた誤りだと考えられる³⁾。

・爽：希式反は反切帰字を「歳」と誤ったためのものか

「爽」は『広韻』では昔韻書母の音であるが、反切上字の「希」は曉母で声母が合わない。ところで『広韻』で「希式反」の示す音（曾撰入声職韻曉母）をもつ字をみると、「爽」という字がある。「爽」は『説文』にみえない字であるが⁴⁾、その同音字「𪗇」には「希式反」という反切が使われている。このことからすると、「希式反」は「爽」と「𪗇」との字面の類似から誤って付けられた反切であると考えられる。

1.3. 変化の起こった条件

1.2.の(1)で挙げた反切混用例から、誤写や類推の結果生じたと思われるものを除いた結果、確実に梗撰入声と曾撰入声の混用を示す反切は次の7例である。

(2) 碧：彼力反 祐：時即反 繡：自即反 圜：以陟反

疫：兪晁反　煎：齊石反　食：神隻反

(2)に挙げた反切をみると、反切下字の混用を示す例は梗撰入声では三等AB類の昔韻、曾撰入声では三等BC類⁵⁾の職韻のものだけである。つまり、繫伝反切にみられる梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用は、実はそれぞれの三等韻である昔韻と職韻の混用なのである。

更に、(2)に挙げた反切の下字についてみてゆくと、ひとつの傾向がある。すなわち、これらの反切下字は声母がすべて舌歯音である。繫伝反切では反切下字に舌歯音を専用するということはないので、このことは何らかの現象を反映していると考えられる。更に反切帰字については、梗撰入声には「碧：彼力反」の例があって決して舌歯音字ばかりではないのだが、曾撰入声では反切帰字は舌歯音字のみである。

反切下字の混用は韻母の合流あるいは音声的近似を反映しているものである。梗撰と曾撰の韻尾は、唐末～五代期にはともに硬口蓋的な $-ŋ$ 、 $-k$ であったと考えられている（花登 1974）。そして昔韻も職韻もともに三等韻であり、口蓋化介音 $-i-$ をもつ。2つの韻の違いは、主母音が広い e であるか（昔韻）、狭い a 、 e であるか（職韻）だけである。

梗撰韻母の主母音は、韻尾の口蓋性に同化して主母音の開口度がやや狭まっていたと推定される。一方、曾撰の主母音は中舌音であり、周囲の環境によってさまざまな変異を生じると考えられる。職韻のように、介音 $-i-$ と硬口蓋化韻尾に挟まれる環境では、主母音の実現はより前舌的になると考えられるのである。

反切下字の混用に関係する曾撰入声字が舌歯音字のみであることは、次のような理由があると考えられる。すなわち、舌歯音声母は舌尖が調音に関与する子音であり、どちらかといえば前舌的な特徴をもつ。これに介音 $-i-$ と硬口蓋韻尾をもつ職韻韻母が後続する場合、中舌的な主母音は声母・介音・韻尾とも前舌的な環境に囲まれることになるので、その音声的実現は最も前舌的に、ときによってははっきり前舌母音で発音されたと考えられる。

以上のことを図式化すると次のようになる。

- (3) 昔韻 -iek > -iek (韻尾に同化)
 職韻 (舌歯音声母) -iək > -iek (周囲の環境に同化、昔韻と合流)

このため、舌歯音声母をもつ職韻の字音は昔韻のそれと近似あるいは合流して、繫伝反切では反切下字の混用という現象で現れたのである。

職韻の舌歯音以外の声母が反切混用に現れない理由としては、以下のよう
 に説明することができる。まず牙喉音開口声母のもとでは、声母が前舌
 的なものでないため、主母音 ə を前舌化させる環境としては舌歯音よりも
 弱く、主母音は中舌的に実現した。また声母が唇音や牙喉音合口の場合、
 主母音は音韻論的にはB類に属する /e/ であったが、先行する合口介音 -u-
 や唇音声母の円唇性の影響を受け、やはり中舌的に実現した。このように
 舌歯音以外の声母のもとでは、主母音が中舌的に発音されたために、たと
 え昔韻の主母音が狭化してeに近くなっていたとしても、それらの韻母を
 表わすためにはなお不適當であったと考えられるのである⁶⁾。

1.4. まとめ

以上のことから、繫伝反切における梗攝入声と曾攝入声の反切下字混用
 は、実際には昔韻と職韻 (舌歯音声母) との間でのみ起こったものであり、
 それは中舌的な主母音 ə が、舌歯音声母・介音 -i・硬口蓋韻尾- ɰ に挟まれ
 るという環境の中で前舌化したことによる、と結論づけることができる。

梗攝入声と曾攝入声の合流は宋代以降更に進む。曾攝では職韻で主母音
 の前舌化が進行し、牙喉音開口声母のもとでも主母音がeに変化した。一
 方、梗攝では主母音の狭化がさらに進み、拗介音をもたない二等韻までも
 が入声を除いて主母音が狭く変化した。こうして、宋代等韻図にみられる
 一等登韻・二等庚耕韻・三四等庚清青蒸韻という梗曾両攝の合流に到った
 のである。更に一・二等韻の合流によって、『中原音韻』の庚青韻が成立す
 る。繫伝反切にみられる反切下字混用は、この一連の変化の先駆けをなす
 ものであった。

2. 外転一等韻と二等韻の反切下字混用

2.1. 論を進める前に

もう一つ、外転一等韻と二等韻の反切下字混用について取り上げる⁷⁾。

そもそも中古漢語の音体系では、外転一等韻は奥舌広母音を、二等韻は前舌広母音を主母音にもつ直音韻と考えられている⁸⁾。これらは母音体系の単純化により、古官話期までにすべて合流するが、そのときにも外転一等韻 a に対して二等韻は牙喉音開口で介音を発生させて ia となり、中古漢語の前：後の対立の痕跡をとどめる。

外転一等韻と二等韻の主母音合流の過程を考える際にカギとなる現象は、邵雍 (1011-1077) の『皇極経世書声音唱和図』に現れる⁹⁾。これの「十二音図」では、一等韻の音をもつ字を「開」の欄に、二等韻の音をもつ字を「発」に記すが、この図では外転一等韻のうち「丹大貪覃南哉在采才三」の 10 字が「発」の欄に置かれるのである。

これら「発」の欄に置かれた一等韻字には、いくつかの特徴がある。

・声母は舌歯音に限られる

唇牙喉音を声母にもつ一等韻字は「開」の欄に置かれる

例えば影母字「安」は「開」の欄に配置される。

・韻母は蟹・山・咸摂の開口一等である

一等韻でも効摂字である「草」や「曹」、また蟹・山・咸摂一等でも合口の「内」や「兌」は、「開」の欄に配置される。

この現象は、外転一等韻と二等韻の合流が一度に起こったのではなく、声母や韻母の条件によって段階的に起こったことを示している¹⁰⁾。

ところが、『皇極経世書声音唱和図』よりも 1 世紀近く成立の早い繫伝反切にも、外転一等韻と二等韻のかかわる現象が存在する。すなわち、外転一等韻と二等韻の反切下字が混用される例が存在するのである。

これについて最初にはっきりと指摘したのは梅 1963 である。その中では蟹摂・山摂の一等韻の中に二等韻の反切下字を取るものが存在することが指摘されている。そしてその一部、反切母字の声母が精組であるものについては、二等韻に精組声母を取るものが存在しないことに理由を求めている。ただしこれらの例がなぜ蟹摂・山摂のみに存在するかについては、理由を明らかにしていない。

以下ではこの現象が、どのような条件下で起こっているかを考察する。そして中古漢語から古官話への変化の中で、外転一等韻と二等韻の主母音

